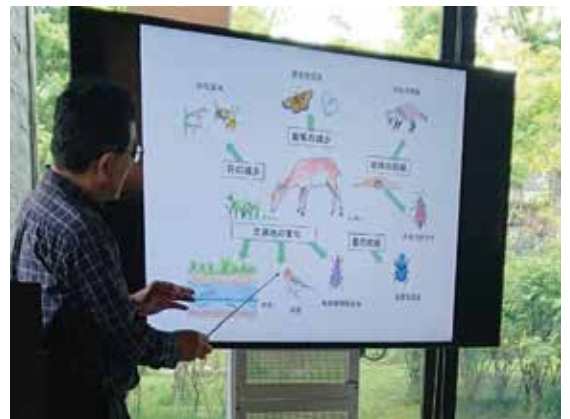




高槻成紀先生の講演 「シカ問題に取り組んで思うこと」

今回の講演会は、まさに驚きの連続でした。鹿の研究と聞いて、私は単純に個体数や移動ルートの調査かなと想像していましたが、先生の調査と研究は、骨や角、胃の内容物、鹿が食べる植物の種類や咀嚼数など信じられない程多岐にわたり細かく、なんと鹿に食べられた芝の種の発芽率にまで及んでいました。柵で囲った草地では虫を1匹1匹数えるような地道で膨大な作業を何年も積み重ねてきたことに圧倒されつつ、鹿が環境に与える影響の大きさを実感しました。



シカの増加が生態系に与える影響 高槻成紀先生

先生のお話を聞いてから、今まで何気なく見ていた軽井沢の鹿や自然に対して、少し違った角度から見ようとし始めた自分に気づきました。軽井沢の鹿は何を食べ、環境にはどんな影響があるのか知りたくなりました。まだ軽井沢に移住して1年足らずの私にとって、この講演に参加できたことは本当によい経験でした。環境について考えるスタート地点となったと言えます。

それから、先生のちょっとしたおまけ(?)のお話もとても好きでした。玉川上水のアマナと親子の話、メス鹿の骨の話、ヒサカキの花の香りの話など…研究者ならではの気付きやエピソードは、生き物全体にどこかつながりのようなものを感じました。ぜひまたお話をお聞きする機会があれば幸いです。

[志甫抄子]

い卵がある。卵塊は直径20cm弱。1つの卵塊の中に1,000個以上の卵がある。次にカエルを探そうと水の底まで網を突っ込み掬い上げる。子どもたちはもちろん大人も童心に返り網を振るう。いろいろな生き物が網に入った。ヤゴ・コオイムシ・スジエビ・ヒルなど。天敵だらけだ。外側の卵塊は天敵に狙われやすい。だからメスたちは真ん中の方に産みたがるそうだ。流れのある水路を探すと、ホトケドジョウがいた。この魚も絶滅危惧種で発地全体の保全が求められる。

第2ポイント、田んぼの水溜り。オタマジャクシになっているものもあった。田んぼを歩き1周する。反対側の水溜りは干上がりそうだった。石塚さんは戻る途中、今日産卵したばかりの卵塊を発見されたようだったが後ろから農作業の車が来ていたので、前の人しか観察ができなかった。真新しい卵は球状でビー玉のようにツヤツヤしていて美しいそうだ。

駐車場に戻り、ニホンアマガエルとシュレーゲルアオガエルを見せてもらう。次のカエルたちの登場と入れ替わりに、産卵を終えたヤマアカガエルのメスは一目散に山に帰り、再び冬眠をする。オスは最後のメスまで待つ。メスが来なくなると、山に帰りまた冬眠に入る。

何故まだ寒い時期に産卵するのだろうか。石塚さんは天敵であるヘビや他のカエル・水生昆虫などが活動していない時期の方が有利だと説明されていた。

この観察会の中で石塚さんの自然に対する愛や優しさに何度も触れた。雨の夜に下見に来た時、道路で寒くて動けなくなったカエルを脇に避難させるのに2時間もかかってしまった話。観察中にも干上がりかけた卵を移動させていたこと。こういう話をにこにこ、真剣に話されていた。それと参加者にいろいろなものを見せたいという一生懸命な気持ちが感じられた。生物多様性や発地の良さと大切さを知ってもらいたいのだ。

参加者の方には、この観察会をきっかけにヤマアカガエルに関心を持ってもらい、発地の大切さを知ってほしい。これは当会の気持ちでもある。

[阪本利継]

馬取山田地区 ほ場整備事業への取り組み

馬取山田地区では来年の営農開始を目指して工事が進み、その風景は一変した。6月末現在、入口西側と最奥部のアサマフウロ自生地周りだけがわずかに以前の姿をとどめているにすぎない。



南部(奥部) 2025年6月23日撮影

2021年春、自然保護審議会での町担当課の計画説明を受け、私たちは自然環境を保全したいとの思いで動き始めた。町との折衝・議会への請願・専門家による植生調査・署名活動・県農政部への要望書提出、と奔走してきた。事業主体が町、地権者の大半が町内、営農予定者も町内ということで、皆で知恵を出し合えば自然環境と共存する農地の実現は可能と信じて取り組んできた。

22年、地権者、町、県の了解のもと専門家による現地調査が実現した。東京農業大学宮本教授、群馬県立自然史博物館大森先生、長野県植物研究会藤田氏が3月から9月まで手弁当で調査を実施された。先生方の意見を入れて実施された翌年の県の調査では22種もの希少動植物の存在が判明することとなったが、希少種は移動移植により工事を進めるという方針が変わることはなかった。自然保護審議会の町長への意見具申(23年6月)の通り、「住民参加による合意形成の場の設定」が成されておれば生態系一部保全の道は開けたのではないかという思いは強い。

本事業は、2018年8月31日佐久地域振興局農地整備課から町に声がかかり、9月中に事業の基本構想の申請を求められて9月11日町議会全員協議会に諮り20日可決。国と県が90%を負担するという補助金ありきで一気に動き出した事業では、当初、希少動植物の存在の可能性すら顧みら

れることは無かったはずである。移植後のモニタリングについて、工事完了までは県が実施する。

「調査結果概要」には「移植後5年*程度状況変化を監視することにより、移植先の環境に適応したか評価」との記載がある。工事完了後は町がその任を担うことになるはずだが、レッドデータブック作成中の町として彼らが生きのびて世代交代できる状況になれるよう努力して欲しい。私たちもしっかり見守っていきたい。

食料自給率向上のために農地整備事業に対する期待はますます高まると考えられる。その多くが公共事業であるならば、率先して「環境配慮」を大きく掲げて行われるべきであり、事業主体となる自治体は地権者・営農者・住民の合意形成に心を砕いて欲しい。地権者や営農者の利益を損なわずに事業を進める為には、自治体が動くしかないと考えている。

県の調査結果報告会(23年11月)議事録に、県環境保全研究所尾関主任研究員の発言が残っている。「軽井沢町では、OECM*に該当するような土地がまだ残されているので、農業を営みながら自然を保全する地区として活用することを重要なテーマとし、農地整備と並んで考えてみていただきたい。」自然環境と共存する軽井沢町の農地が全国のモデルケースとなって欲しい。

2,783筆もの署名に応じて下さった皆様、活動を理解し応援いただいた皆様のご期待に沿えず申し訳ない気持ちで一杯だが、この経験を生かすことが後世への責任と自覚し活動を続けていきたい。

軽井沢サクラソウ会議 文責：須永 久



中央部 2025年3月15日撮影

※「長野県環境影響評価マニュアル」では、植物の事後評価期間を5～10年目安

※「保全地域以外で生物多様性保全に資する地域」

農業体験という名の自然観察会をやってみた

会員 渡辺久義

連載その①

近くの中学生在が「ひない渡辺農園しどけ村」に農業体験にやってきました。今年は私が担当する事になったので何をやるか考えました。農作業は、収穫、草取、水遣り、剪定、防除、施肥、耕運、袋詰め、出荷と多岐に渡ります。時期的に収穫できる野菜はスナップエンドウ、イチゴ、ブロッコリー、ホウレンソウなど沢山ありましたが、どうせなら自分で収穫した農産物を家に持って帰って家族みんなで話をしながら食べてもらいたいと思い、作業的には比較的簡単なスナップエンドウの収穫体験をしてもらう事にしました。

私は考えました。大館市の片田舎とはいえ、生徒の中にはスナップエンドウの収穫を実際にした事がある人は殆どいないだろう。なので彼らにとって新鮮な体験になると思う。しかし単に収穫のみだと何かが物足りない。より面白くできないかと思案しました。「そうだ自然観察会にしちゃえばいいじゃん！」と思い付き、やってみる事にしました。

当日、数人の教員に引率されて10名の中学生在が農園にやってきました。2班5人ずつになって、スナップエンドウのアーチに沿って並んでもらいました。「今日は目の前にあるスナップエンドウを収穫してもらいます。まずは観察して気付いた事を言ってみて下さい」と伝えました。生徒達は一人一人、眼前の植物と対峙して観察を始めました。

さて話は変わりますが、読者の皆さんはスナップエンドウを食べた事があるという方は多いと思いますが、実際に生えている姿を見た事ありますか？ ない方は、是非、想像してみてください。

さて話を戻します。生徒にじっくりと植物観察してもらってから一人一人に気付いた事を話してもらいました。

生徒H：「葉っぱの先からクルクルとした物が出ています」

農家A：「それはヒゲ蔓ですね。スナップエンドウは蔓性の植物なのでヒゲ蔓を出して他の植物に絡まって伸びていくんです」



スナップエンドウの花



スナップエンドウのヒゲ蔓

生徒H：「本当だ。ネットを掴んでる」

農家A：「スナップの面白い所は葉っぱの先からヒゲ蔓が出ている所ですね。この構造は単に面白いだけでなく、生存競争を勝ち抜く機能があると私は考えています」

生徒H：「どんな機能ですか？」

農家A：「それをこれから観察しながら説明しましょう。ひげ蔓のある葉は、前と後どちら側に沿って葉を伸ばしていますか？」と観察を促しました。

生徒達：「真横よりもちょっと後側です」

農家A：「そうですね。人間が胸を反って両手を広げたような形をしていますね。スナップエンドウは大きく葉を広げてから、背後の植物などに寄り掛かる為だと考えられます。さて花と実はどちら側に付いていますか？」と観察を促しました。

生徒達：「前の方だけが多いです」

農家A：「うん、正面にだけ偏って花が付いていますね。背後の植物と反対側、つまり日光に近い方に花を咲かせる事で、より虫が受粉しやすくして子孫を残しやすくしているのだと考えられます。農業では植物の特性と機能を理解して利用する事で、美味しく、そして効率的に収穫できるように栽培しています。

この続きは次号のお楽しみ！

田植が終わわりほっとする間もなく草取りが待っておりま
す。田植は時機を失すると大
変で収穫に響きますが、田の
草はついおそくなりがちで、
草が大きくなりすぎ苦労する
事があります。通常は三回で
す。一回目は、稲が小さいの
と、草が少ないですが、二回
目からは身支度は長ズボン、
脚絆、長袖シャツ・手甲。稲で
手足をきらないように、又、
働きやすくするための仕度し
ます。二回目からは、稲と稲
との畦間を除草機を押し転ば

上発地の最長老だった
佐藤輝夫さんは、大好き
な上発地の思い出を障子
紙の巻物、十巻余に達筆
で書き遺してくださいま
した。イラストもご自身
のもんです。ご遺族のご
了解を得て、この連載を
続けさせていただいてお
ります
かつての軽井沢の農村の
人々のくらしのようす、
ご苦労、思いを知ること
が出来たらと願っており
ます。

して草を取る。四つん這いにな
って、稲株のまわりの草を
むしる。草をまるめて、土の
中に埋めこむ。太陽が照りつ
ける暑い日など、ほんとに大
変な仕事である。出穂して背
に稲の花を背負って稲の中
で人が見えなくなる頃ですが、
私はこの頃は良し悪しがわか
りません。なんとしても農家は
腰を曲げる仕事が多いです。
昭和三十年代、水田除草剤
が入ってきました。田植一週
間くらいで、散粒機で散布し
たのです。水面一面に、まっ



しろく生物がういたのには驚
きました。どじょう、げんご
ろう、蛙、あらゆる生物が真っ
白になって浮いていました。
水田の中には、こんなにも多く
の生物がすんでいたのかと？
それと同時にこの水で育った
稲米を人間が食べて害になら
ないか、すごく心配でした。当
時の除草剤は、すごかったこ
とがわかり、現在はずごく改良
されたとの事であります。
除草剤により農家は草取り
が少なくなり、米作りがすご
くたのしくなりました。除草
剤は心配です。圃場整備、野
焼きにより、どじょう、蝗がい
なくなつたのはさみしいです。
まわりの改良と自然とは一致
しないものです。昔の姿に
は戻らないでしょう。
最近、野菜などで無農薬な
どと云う事が盛んに云われて
おり、別売りなどとしており、
人気があります。生物と人間と
の両立が不可能でしょうか。
考えさせられます。馬の代掻
き、田の草取りは、これから
見る事がなくなるでしょう。

事務局から

■このニュースレターは年4回だけの発行です
ので、活動予定や新しい情報は、メールでお届
けしています。メールが届いていない会員の方
は、軽井沢サクラソウ会議事務局からのメール
(info@sakuraso.org □は、アットマーク)
を「受信可能リスト」に入れてください。

■軽井沢サクラソウ会議の活動は、皆さんの会
費と寄付金で行われています。
寄付等お振込みは下記までお願いいたします。

軽井沢サクラソウ会議
ゆうちょ銀行一八（イチイチハチ）支店
普通口座20347921